

下顎前突症とハプスブルグ家 (II)[†]

難 波 雄 哉*

まえがき

前編 (40 巻 11 号) では肖像と伝記からハプスブルグ家の人々に見られる「ハプスブルグ顎」について述べたが、今回は肖像が果たして実像を忠実に写生しているかどうかについて考察するとともに、医学的見地からみた「ハプスブルグ顎」についても略述する。

II. ハプスブルグ顎の医学

今では下顎前突症が遺伝的疾患であることはよく知られている。ことに、ハプスブルグ家が戦争によらず婚姻による王権の拡大を家訓としたため、この遺伝子はスペインとオーストリアのハプスブルグ家に止まらずイギリスの王家、イタリアのメジチ家、フランスのルイ王朝と全欧に広がったのである²⁹⁾。メンデルの法則が一般に認められるようになるのは 19 世紀末であるが、「ハプスブルグ顎」という呼称の流布は、本症が遺伝学で体系づけられるのを待つまでもなく世間が遺伝の実態を認めて生まれた言葉であろう。

遺伝学的には硬組織の遺伝疾患は優性遺伝が多く、肖像から見た「ハプスブルグ顎」は真性下顎前突症でアングル分類 III の優性遺伝と言われている。他方で、女性の肖像に「ハプスブルグ顎」が少ないことから男性に強く現れる遺伝形式であるとするものなどもあり⁹⁾、必ずしも統一的理解に達していないのが現状のようで、ハプスブルグ家の下顎前突症は常染色体性優性遺伝とする説が多いものの、下顎前突症は単一劣性遺伝の傾向も

あるとする説もある¹¹⁾²⁴⁾²⁹⁾。

また、従来から「ハプスブルグ顎」の患者に合併した所見として、大きく突出した下顎の他に、大きく隆起した鷲鼻、厚く垂れ下がった下唇、眼球突出、下眼瞼の外反、偏平な頬骨部、後退した前頭部などが肖像画から指摘されており、「ハプスブルグ顎」はこれらの特徴的顔貌の総称としても使われている。他方、Winter らはその著書「Multiple Congenital Anomalies」で下顎突出を合併する 60 疾患を挙げており、その中でこれらの特徴的顔貌を伴う下顎突出を「ハプスブルグ症候群」と呼んでいる²⁵⁾²⁸⁾。

この他にハプスブルグ家では痛風、喘息、癩癧、メランコリー、発狂、梅毒などの疾患も受け継がれている。これに血縁間での結婚が繰り返されてきたことが一層拍車をかけており、近親結婚の繰り返しは生物学的に個体の弱体化をすすめ、スペイン・ハプスブルグ家がカルロス二世で断絶したのもこのためであろう。「ハプスブルグ顎」とは関係ないが天然痘や腸チフスがハプスブルグ家に大きな災いをもたらしたことも付け加えておく。

III. 考 察

本稿では画集やハプスブルグ家関係の書籍に掲載されている肖像画の写真を資料として「ハプスブルグ顎」を追究したが、肖像や彫像がどこまで実像を正しく表現しているか不安がないわけではない。中でも女性の肖像に「ハプスブルグ顎」が少なかったのが気になる。

「ハプスブルグ顎」が肖像にはっきり登場するのはテツァーノのカール五世からであるが、これについては 16 世紀になると芸術表現をリアル

[†] 1997 年 7 月 3 日受領
1997 年 7 月 30 日掲載決定
* 長崎大学名誉教授



図 II-1 カール五世の彫像（ディッシュラー作）
下顎が大きく前突しているのが側貌でよく分かる。
「ウィーン美術史美術館（スカラ/みずす美術館
シリーズ）」より

ズムが支配するようになった結果として妥協やへつらいがなくなり、以前にははばかれた王の特異な顔貌が有りのままに表現されるようになったためと、すべての美術評論家は解説している。確かに、これは 16 世紀以降になって王家の肖像に「ハプスブルグ顎」が出てきた理由の一つではあるかもしれない。しかし、当時の宮廷画家が果たして堂々と王や女性の肖像をあるがままに描いたであろうか。宮廷画家の地位を維持することには生活と名誉がかかっている。この地位は芸術と心中して簡単に失ってよいものではない。テツァーノの場合でも確かにカール五世の大きく突出した下顎を描いてはいるが、同時に堂々とした王の貴祿を遺憾なく描ききっている。カール五世の実像は不明であるが、ウィーンの美術史美術館にあるヨハニム・ディッシュラーのカール五世の側面像（図 II-1）では口が閉じないほどの顎の突出で、これが実像に近いとすればテツァーノの肖像画（図 II-2）は許されるギリギリまで修正した「ハプスブルグ顎」ということができる。まったく「ハプスブルグ顎」を消してしまっただけは嘘になる、このあたりがよい線でしかも威厳に満ちた王

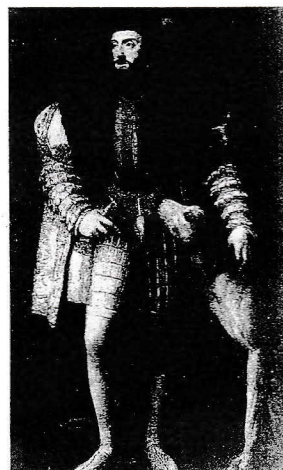


図 II-2 カール五世（テツァーノ画）
下顎は出ているが、勇ましい王の勇姿として描かれている。
「ハプスブルグ家と芸術家たち」より

として描くことによって埋め合わせているのではないか。下顎が大きく出ている、とても「顎のおばけ」や「まぬけ顔」には見えない。カール五世に信頼され 20 年にわたって親交を重ねた理由はこのあたりにあるのではと筆者は考えている。

このことはベラスケスについても言えることで、ベラスケスは対象を形からその内面までも見きわめ、人間の場合では心理状態までも正確に表現すると言われた画家で、モネをして「画家の中の画家」と言わしめたほどである。ベラスケスのフェリーペ四世の肖像画（図 II-3, 4）は厚い下唇とともに大きく突き出た顎、隆起した鉤鼻、外反気味の下眼瞼など「ハプスブルグ顎」に伴う特徴的顔貌を見事に描き出している。美術評論家はベラスケスが真実を曲げたり美化することも王におもねることもなくありのままを表現して、その中に威厳と風格を感じさせる作品にしていることを絶賛している。この場合もフェリーペ四世の実像は不明であるが、ベラスケスと言えどもありのままを描いているとは考えられない。許される限度内で特徴的な顔貌を表現し、王のその時々心理状態から時に明るく時にメランコリックに描いているのではないか。



図 II-3 50歳のフェリーペ四世(ベラスケス画)
「ハプスブルグ顎」の特徴的顔貌はよくでてい
るが、当時の内外の情勢を反映してか、表情は暗
い。
「BBS ギャラリー世界の巨匠ベラスケス」より



図 II-4 フェリーペ四世(ベラスケス画)
ベラスケスによるフェリーペ四世の肖像画は多
いが、いずれも「ハプスブルグ顎」の特徴的顔貌
とその折々の表情が巧みに描かれている。
「BBS ギャラリー世界の巨匠ベラスケス」より

ベラスケスは夭逝した王子バルタサル・カル
ロスを好んで描き、いまだ「ハプスブルグ顎」が
現われていない幼年期の王子を明るく明日への希
望を感じさせる作品に仕上げている(図 II-5)。
このことは彼が当時の宮廷に集められていた道化
人、侏儒¹¹⁵⁾、不具者などを好んで描いているの
と通ずるものがあると筆者は考えている。これら
はすべては絵画や美の対象とは考えられなかった
ものであるだけに、ベラスケスのリアリズムであ
るとか人生哲学云々の評もあるが筆者は別の見方
をしている。すなわち、宮廷画家としてのベラス
ケスとしては、「ハプスブルグ顎」をもつ王家の
人々の肖像をありのままに描くには大きな遠慮が
あり、表現を抑制するには芸術家としての心の葛
藤があっただけに、侏儒などの醜さをあるがまま
に描くことに、ある種の解放感を味わったのでは
ないかと推測するのである。このことは健康で明
るいカルロス王子を好んで描いたことにも通じ、
醜さにしても美しさにしても、ありのままが掛け
る点で王子や侏儒を好んで描いたのではないかと
いうことである。

絵画であれ彫像であれ実像がありのままに表現



図 II-5 バルタサル・カルロス王子
(ベラスケス画)
「アサヒグラフ別冊美術特集(西洋編 18) ベラ
スケス」より

されているとは限らないので、肖像に「ハプスブ
ルグ顎」がある場合は「ある」とみてよいが、な
い場合は「ない」とは限らない。カール六



図 II-6 レオポルデーネ
ブラジル皇帝ペドロ一世王妃。フェルディナン
ト一世の妹。この肖像画では特別のことはない。
「ハプスブルグの女たち」より

世⁵⁾¹²⁾²⁷⁾のように肖像画によって「ある」ものと判断が困難なものがある例では「ある」とみてよいと考えている。

また、肖像と伝記が異なる場合は伝記に信を置きたい。オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の弟でメキシコ皇帝となり後に銃殺されたマクシミリアン²²⁾は肖像で見る限り正常であるが、マクシミリアンにベルギー王女シャルロットが嫁ぐとき、ビクトリヤ女王が「あんな顎と口もとのおかしい男と結婚しなくても」と言ったという話があるところを見ると、およその見当がつくというものである⁵⁾¹³⁾。肖像で異常がない皇帝フランツ二世²⁾ (オーストリア皇帝としては一世) の皇女でブラジル国王の王妃となったレオポルデーネは下唇が厚く顔貌に劣等感をもっていたと言われているが肖像画 (図 II-6) では特別のことはない⁵⁾¹⁸⁾。また、マリア・テレジアの皇女でルイ十六世の王妃となったマリー・アントワネットは、肖像 (図 II-7) では顎にも下唇にも前突傾向は認められないが、革命画家として有名なジャック・ルイ・ダヴィドの素描 (図 II-8) では、はっきりと下唇下顎が出ている。処刑直前ということもあって遠慮の必要がなかったのであろう。



図 II-7 マリー・アントワネットの像
フランスよりマリー・アントワネットの母であるウィーンのマリア・テレジアに贈られたものである。
「ウィーン美術史美術館 (スカラ/みすず美術館 5)」より



図 II-8 マリー・アントワネットの素描
(ダビッド画)
処刑直前のもので下顎の突出が描かれている。
「図説ハプスブルグ帝国」より

伝記の場合は対象が眼前にいないとか、すでに過去の人になっているなどで肖像画よりも書きやすいかもしれないが、やはり表現に気がつかった



図 II-9 フェルディナント一世
下唇が厚く出ている他は、特別のことはない。
「ハプスブルグ帝国衰亡史」より

ことは考えられる。たとえばフリードリッヒ三世は歯並びが悪く食物を噛まずに丸呑みしていたため常に胃炎を患っていたとか、マクシミリアン一世は顎の骨格に器質的欠陥があったなどの記事は下顎前突に連なるものを推測させる⁴⁾⁵⁾。

「ハプスブルグ顎」と並んで「ハプスブルグの下唇」という言葉がある。フェルディナント一世は肖像画(図 II-9)では厚い下唇が描かれた「ハプスブルグの下唇」である。カール六世の皇女であるマリア・テレジアは、その多くの肖像画においては下顎の突出は見られないが(図 II-10)、中には下唇が厚く描かれたものもある¹⁾⁴⁾¹²⁾²³⁾。下顎前突に合併して下唇が出るのはよく分かるが、下顎前突がなくて下唇が厚いだけの肖像画も多い。突出した下唇は独立した症状の一つとされているが、中には下顎前突を厚い下唇でごまかした肖像画もあるような気がする。

ハプスブルグ家の血を継ぐ女性で、「ハプスブルグ顎」がはっきりと肖像に描かれているのは、カルロス四世の王妃マリア・ルイサ(図 II-11)とその姉ホセファであるが、強いて言えば前編で述べたカール五世の妹であるマリア(図 II-12)とマルガリータ(図 II-13)、さらにはマルガリータの腹違いの姉であるマリア・テレサ(図 II-14)



図 II-10 マリア・テレジア(メラー画 1727 年)
10 歳時の肖像画。20 年間に 16 人の子を産み、その間、政治、軍事を牛耳る女帝となり「国母」と呼ばれた。これでは「ハプスブルグ顎」の特徴はまったくみられない。

「ハプスブルグ家の人々」より



図 II-11 マハ風のファッションを身につけた王妃(48 歳)、マリア・ルイサ。
「ビジュアル美術館 10 巻、ゴヤ」より

にわずかにその傾向がうかがえる程度である。つまり、女性に「ハプスブルグ顎」の肖像がないのは本症の遺伝形式が男に強く現れるためか、作者



図 II-12 マリア



図 II-13 10 歳時のマルガリータ
(ペラスケス画)

が女性に気がつかっているためかのどちらかであるが、後者であるとすれば男の場合を含め肖像画が必ずしも実像どおりでない証拠となる。

本症が常染色体性優性遺伝であるとすれば性差がなく各世代の 1/2 に発症するので、たまたま発症しない者があっても不思議はないが代々にわたって女性だけに現れないということは考えられな



図 II-14 王女マリア・テレサ (ペラスケス画)
フェリーペ四世の王女。マルガリータの腹違いの姉。この肖像画はフェリーペ四世よりウィーン
のフェルディナント三世に贈られたもの。下眼瞼
の外反, 平な頬骨部, やや大きい下顎に「ハプス
ブルグ顎」がうかがえる。
「BBS ギャラリー世界の巨匠ペラスケス」より

い。16 世紀以後の男性の肖像画では程度を押さえるということはあるものなように描くことは少なかったと思われるが、女性の場合ではとくに気がつかって「ハプスブルグ顎」の表現をさせたようである。しかし、筆者が接した限りのハプスブルグ関係の著述では、医学的文献を含めてこの点を考察しているものはなぜか皆無であった。

「ハプスブルグ顎」と言えばカール五世が有名である。これはカール五世の下顎が歴代ハプスブルグ家の中でとくに高度であったことが考えられる。カールと弟のフェルディナント、両親と祖父のマクシミリアン一世などを描いた有名（よく用いられる）なストリーゲルの肖像画（図 II-15）がある。これを見るとフェルディナントの顎も長いマクシミリアン一世の下唇も出ている。しかしカールの下顎は前二者に比べてさらに大きく突出している。この絵から言えることは、それぞれの下顎の実像が表現されているかどうかは分からないが、登場人物の下顎の大きさと突出の程度が



図 II-15 マクシミリアン一世の家族図
(ストリーゲル画)

前列中央がカール五世、左がフェルディナント一世。いずれも下顎が長い。後列左がマクシミリアン一世、大きな鷺鼻と下唇の突出がある。後列中央の横顔がフィリップ美公で「ハプスブルグ顎」は見られない。

「ウィーン美術史美術館 (スカラ/みすず美術館シリーズ)」より

割引されているとしても順位は信じるに値するのではないかということである。

19世紀後半になると写真の時代になるが書物で接するハプスブルグ家の人々には肖像画が多く、口もとを隠してしまうほどの口髭を生やしている。フランツ・ヨーゼフ皇帝²²⁾²⁶⁾は写真(図II-16)であるが、サラエボで凶弾に倒れ第一次大戦の引き金となったフランツ・フェルディナント大公²²⁾²⁶⁾は口髭を生やした肖像画(図II-17)である。面白いのはスペイン・ハプスブルグ家の血をひくフランスのブルボン王朝最後のシャルル十世(1757~1836年)である。アングルの肖像画²⁰⁾で見ると多少下唇が厚いものの王にふさわしい立派な顔として描かれているが、風刺画(図II-18)ではどの作家のものも下唇が垂れ下がり、下顎が出て口が閉じず、大きな鷺鼻という典型的な「ハプスブルグ顎」に描かれている。おそらく風刺画は誇張があるにしても、より実像に近いのではないと思われる⁶⁾。

「ハプスブルグ顎」が全欧の王家、王族に広がったことについては、戦うことなく婚姻によって支配を拡大するというハプスブルグ家の家訓が災いしたことは上述したが、さらにはハプスブルグ家という名家の権威とキリスト教世界における神



図 II-16 晩年のフランツ・ヨーゼフ皇帝 (写真)
口ひげで上顎が隠されているが「ハプスブルグ顎」の特徴的顔貌はなさそうである。皇帝は18歳から68年間にわたって王位にあったが、この間には近親者の次々の不吉な死があり、ハプスブルグ王朝の衰退に耐えた生涯であった。

「黄昏のウィーン」より



図 II-17 大公フランツ・フェルディナント
海軍大将の衣装をつけた肖像画。

「ハプスブルグ帝国衰亡史」より



図 II-18 シャルル十世の風刺画（シャルロー）
カリカチュアながら「ハプスブルグ顎」がよく
表現されている。

「風刺図録のヨーロッパ」より

聖ローマ皇帝の家系という高貴な血統を維持するための至上命令から、広く結婚の対象を求めることができず近い血縁の間での婚姻や近親結婚を繰り返したため、不幸にもハプスブルグ家の血統がかえって不健康なものになったのは皮肉なことであった。

常染色体性優性遺伝の特徴は性差がないこと、各世代ごとに病者がいること、病者は1/2の確率で発症し次代に伝わること、健者からは病者は生まれないなどである²⁴⁾。しかし肖像画から見る限りでは女性には「ハプスブルグ顎」がないか、あっても軽症で明らかに性差があり、また健者から病者が生まれており常染色体性優性遺伝の理屈にあわない点が少なくない。このことは上述したように肖像画が真を写していないことからくる矛盾とすれば説明がつく。

ところで「ハプスブルグ症候群」であるが、これは Thompson と Winter が下顎前突の他に厚く垂れ下がった下唇、大きな変形した鼻、平たい頬骨部、下眼瞼の外反などが3代にわたって遺伝している「ハプスブルグ顎」によく似た3組の症例を実際に経験したことから、このような遺伝性の症候群が実在することを確認し、「ハプスブル

グ顎」に見られる下顎前突症と、これに伴う顔の特徴的所見を総称して「ハプスブルグ症候群」としたものである²⁵⁾。

「ハプスブルグ顎」の遺伝については理論的に説明できない部分もあるが、考えてみると13世紀以来、ハプスブルグ家の人々は誰一人としてX線像や写真による計測を受けた者はなく、すべて伝記と肖像によって云々しているわけで、厳密には非科学的な資料で科学的な評価をしていることになる。

まとめ

ハプスブルグ家の600余年にわたる歴史には恋あり、情死あり、毒殺あり、暗殺あり、断頭台の露と消えたマリー・アントワネットありで話題性には事欠かず、ハプスブルグ家に関する書籍だけで一つの図書館ができると言われるぐらいである。

本稿ではハプスブルグ家の血統をひく王族の肖像と伝記から「ハプスブルグ顎」を求めるとともに、肖像がどこまで実像を忠実に伝えているかについても考察した。

「ハプスブルグ顎」の発端者については定かでないが現在ではハプスブルグ家の家訓もローマ皇帝も過去のものとなった。「ハプスブルグ顎」の血が消えることはないにしても今では下顎前突に対する手術も一般化している。少なくとも「ハプスブルグ顎」で生涯にわたって悩むことはなくなったという意味では「ハプスブルグ顎」も過去のものになったと言ってよい。

引用文献

本文で取りあげた人物の肖像をすべて掲載できないので、主な肖像や彫像の写真が掲載されている比較的新しい画集や書籍の中で容易に入手または閲覧できるものを取り上げた。

- 1) アサヒグラフ別冊美術特集. ペラスケス (西洋編 18): 朝日新聞社, 東京, 1991
- 2) アラン・スケット (鈴木淑美, 別宮貞徳訳): ハプスブルグ帝国衰亡史. ほるぷ社, 東京, 1980
- 3) ブリタニカ国際大百科辞典. TBS ブリタニカ, 東京, 1993

- 4) 江村洋: ハプスブルグ家. 講談社, 東京, 1990
- 5) 江村洋: ハプスブルグ家の女たち (現代新書). 講談社, 東京, 1993
- 6) 諷刺画像のヨーロッパ (ブックス版). 高橋憲夫, 石塚正英訳: 柏書房, 東京, 1994
- 7) Grabb WG, Hodge GP, Dingman RO, et al: The Habsburg Jaw. *Plast Reconstr Surg* 42: 442-445, 1968
- 8) 井上靖, 高階秀爾編: 世界の名画 (1) ゴヤ. 中央公論社, 東京, 1993
- 9) Hodge GP: Medical History of the Spanish Habsburg. *JAMA* 238: 1169-1174, 1974
- 10) ヒュート・トレバァー・ローパー (横山徳爾訳): ハプスブルグ家と芸術家たち (朝日選書). 朝日新聞社, 東京, 1995
- 11) Iwagaki H: Hereditary influence of malocclusion. *Am J Orthd Oral Surg* 24: 328-336, 1938
- 12) 加藤雅彦: 図説 ハプスブルグ帝国. 河出書房新社, 東京, 1996
- 13) 菊地良生: ハプスブルグ家の人々. 新人物往来社, 東京, 1993
- 14) 倉田稔: ハプスブルグ歴史物語. 日本放送出版, 1994
- 15) モーリス・セリュラス (雪山行二, 山梨俊夫訳): BBS 世界の巨匠 ベラスケス. 美術出版社, 東京, 1990
- 16) 中丸明: プラド美術館 (新潮選書). 新潮社, 東京, 1995
- 17) バトリシヤ・ライト (栗田秀法訳): ビジュアル美術館. 10巻 (ゴヤ). 同朋出版, 京都, 1994
- 18) ラファ・ライトナー (関田淳子訳): ハプスブルグの女たち. 新書館, 東京, 1996
- 19) 世界美術全集: 33巻西洋 (9) 近世 (I). 角川書店, 東京, 1962
- 20) 世界伝記大事典 (桑原武夫編): ほるぷ出版, 東京, 1980
- 21) 須磨コレクション, スペイン美術: 長崎県立美術館, 長崎, 1980
- 22) 須永朝彦: 黄昏のウィーン. 新書館, 東京, 1994
- 23) 宝木範義: ウィーン物語. 新潮社, 東京, 1981
- 24) 田中克美, 石木哲夫, 落合靖一ほか: 臨床歯科遺伝学. 医歯薬出版, 東京, 1981
- 25) Thompson EM, Winter RM: Another family with the "Habsburg jaw". *J Med Genet* 25: 838-842, 1988
- 26) 塚本哲也: わが青春のハプスブルグ. 文芸春秋社, 東京, 1993
- 27) ウィーン美術史美術館 (スカラ/みすず美術館シリーズ 5): みすず書房, 東京, 1991
- 28) Winter RM, Baraitser M: Multiple congenital anomalies. A diagnostic compendium. Chapman and Hall Medical, London, 1991
- 29) Wolff G, Wienker TF, Sander H: On the genetics of mandibular prognathism: Analysis of large european noble families. *J Med Genet* 30: 112-116, 1933
- 30) 吉川逸治編: プラド美術館 (世界美術館第9回配本). 講談社, 東京, 1967

ABSTRACT

Mandibular Prognathism in the Hapsburgs

Katsuya Namba, MD*

The Hapsburgs were famous royal families in Europe from the 13th Century until the 20th Century and they repeatedly intermarried to preserve family purity. Consequently they were cursed with mandibular prognathism in each generation.

This defect has been known as "Hapsburg Jaw" and is not only mandibular prognathism but includes a thickening of the lower lip, prominent and large nose, flat malar areas and moderately everted lower eyelid.

In this paper the author traces "Hapsburg Jaw" in portraits of the Hapsburg family over several generations, and considers the credibility of the portraits while briefly referring to genetics.

*Professor Emeritus, Nagasaki University, Nagasaki 852